

氏名(本籍)	ましこまちや 益子待也 (茨城県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第2126号		
学位授与年月日	平成17年5月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	「重いことば」と「内側の薬」 - トリンギットの死者祭宴における儀礼的贈与の意義 -		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	小野澤 正 喜
副査	筑波大学教授	博士(文学)	古 家 信 平
副査	筑波大学助教授	博士(歴史学)	佐 藤 千 登 勢

論文の内容の要旨

本論文は、カナダ北西海岸インディアン支族であるトリンギット族に見られる通常「ポトラッチ」と呼称されてきた「財の贈与儀礼」を、死者祭宴であると再定義しつつ現地調査資料を踏まえて論考した作品である。

論文構成は序章と8つの章および総括的まとめの終章からなっている。

序章では、カナダ北西海岸インディアン諸族に見られる「ポトラッチ」儀礼に関する1世紀におよぶ文化人類学研究的総括的検討がなされている。従来贈与儀礼とみなされ、勲功祭宴として集団間の序列形成に資する機能のみが強調されてきたことを批判しつつ、「二重葬儀慣行」の最終局面をしめくくる儀礼として新たな光が当てられるべきことが本論文の課題として提示されている。

第1章「「ポトラッチ」という名辞」では、「ポトラッチ」という用語がインディアン社会固有の語彙ではなく初期のヨーロッパ系の宣教師や植民者が使用していた「チヌーク・ジャーゴン」という「ピジン語」に由来することが示されている。この用語の使用によって、種々の現地語名称をもつ諸儀礼が部外者によって単一の範疇の下に包摂され、それが19世紀後半に英語圏の世界に流入したと分析している。一方、トリンギット族において当該の儀礼は「クウォーフ」と呼称されてきており、英語で示す場合には「メモリアル」の語が使用されている。現地社会におけるこの儀礼の意義は「死者祭宴」であり、主要な目的は「死体を終わらせること」もしくは「死を終わらせること」である。このように「ポトラッチ」という語が純粋な「民俗語彙」であるとはいえず、その意味付けも勲功にかかわる贈与儀礼ではない現実を踏まえて、民族誌資料の厳密な批判が今後の研究の前提になるべきことが論じられている。

第2章「本稿で使用される民族誌資料」では、多くの人類学的論考に混乱が見られることを指摘しつつ、従来広く引用されてきた調査報告や民族誌資料の多くが調査と記述の精度において不十分な面をもち、むしろ近年の調査報告に高い資料的価値があり、これは近年の調査方法に関する理論の深化によるものであることが論じられている。そうした考察を踏まえ、資料批判に耐えられる調査資料と著者自身の調査結果のみを本研究における検討対象として採用することが示されている。

第3章「トリンギットの社会」では、トリンギット族の社会組織の概略が提示されている。この社会では

農耕は見られず、主として漁撈が行われ狩猟と採集によって補完されている。経済の根幹をなしているのは川を遡行してくる各種の鮭の漁撈である。母系の親族組織を有し、冬季の定住生活と春から秋にかけての漁撈、狩猟のためのキャンプ生活という年周期のサイクルがみられ、そうした環境的要因が宇宙観と儀礼の体系にも反映している。伝統的な政治組織は母系的な氏族組織間の関係として編成されていたが、ヨーロッパ系移住者との接触以来大きな変化が起きている。多くの住民が賃金労働者になり市場経済の中に取り込まれていき、核家族化の傾向が強まり、従来の集団的な生業活動は比重を低下させている。その過程で、母系氏族に基礎をおいた政治組織の統合性が低下し、伝統的な儀礼の多くが簡略化され、葬儀もキリスト教の影響により火葬から土葬への移行が見られる等の変化の実態が論じられている。こうした最近 100 年間の社会変化の中で、「クウォーフ」または「メモリアル」と呼称される儀礼が彼らのアイデンティティ維持にとって重要性を増している社会的な背景が論じられている。

第 4 章「死のサイクル」では、トリンギット族においては、人の死から一定期間を置いた後に、盛大な「死者祭宴」を催す慣行のあることが論じられている。人の死の直後、死体の火葬と「煙草祭宴」が行われるが、その後 1 年程度の期間を経てから「死者祭宴」がとりおこなわれる。「死者祭宴」に先立って「墓家」や「トーテムポール」が建てられ、火葬された死者の骨がその中に安置される。このように従来「ポトラッチ」として注目されていた儀礼は、トリンギット族においては「二重葬儀慣行」の最終局面であることが示され論じられている。さらにこの儀礼過程は R. エルツの問題提起以来比較が進められている「二重葬儀慣行」研究の体系の中に位置づけられるべきことが論じられている。長期にわたる連続的儀礼群は、内部に多くの下位儀礼群を入れ子構造的に包摂していることが、各儀礼の詳細な記述と儀礼間の関係の考察と共に示され、一連の過程のもつ社会的機能の分析が行われている。

第 5 章「1998 年 11 月 14 日にフーナーで行われた「死者祭宴」の儀礼の過程」では、実際に著者が現地でも参加観察した儀礼の過程についての詳細な記述と考察がなされている。まず主催者側と参加者側の氏族組織の中における位置と儀礼的、政治的な役割等の構造的関連の分析がなされている。そうした社会的関連性が儀礼の中の相互行為、儀礼的な所作と詠唱、儀礼的品目の授受の過程でどのように表現されているかについて詳細な民族誌資料が提示され、考察されている。

第 6 章「「重いことば」の贈与」では、第 5 章で示された儀礼の過程が大きく「泣く儀式」と「歓びの儀式」の 2 つの部分からなることが示され、来客側が儀礼主催者側に対して弔慰のことばである「重いことば」を贈与する局面が儀礼全体で中心的な意味をもつことが示されている。氏族の祖先が原古において超自然的な存在との出会いを通じて「紋章」(アトゥー)を獲得した過程を描いた神話を語ること、つまり「重いことば」を贈与することを通して、祖先の霊は儀礼の場に出現し生者は祖霊と共通の体験をするとされる。そうした儀礼過程の終結後に主催者側から来客側に提供される食事と贈物の持つ意味は一連の過程の構成部分として捉えた場合にのみ把握可能であるとされる。さらに来客側が主催者側に対して贈る「重いことば」は彼らの心の内面を「痛い」状態から「暖かい」状態ないしは「乾いた」状態に転化させ、「内側の薬」(トゥウ・ナーグ)としての効果を持つことが論じられている。

第 7 章「死者との共食」では、「泣く儀式」から「歓びの儀式」への転換の後に、主催者である親族と来客たちが死者を偲びつつ行う共食が死者と生者の同一化を促し社会的紐帯として重要な機能を持っていること、更に来客たちに贈与される贈物が理念的には死者に対して行われているという新見解が提示され論証されている。

第 8 章「死のコスモロジー」では、第 7 章までにおいて論じたトリンギットの死者儀礼がトーテム信仰を含む死のコスモロジー全体と密接な関わりをもち、それとの関連で神話、紋章、個人名、家、赤色、火、父方親族などが象徴的意義を有していることが論じられている。

「終章」では全体を総括して死者祭宴の構造と儀礼的贈与の意味を見直す必要性があり、これは調査方法

論の再検討と密接に関連させつつ進められるべき学界レベルの検討課題であることが提示されている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、長期にわたる文化人類学的現地調査を基礎にして得られた資料に基づきつつ、調査資料の詳細な再検討を行い、儀礼に関する新たな視角からの把握を提唱する極めて意欲的な研究成果である。研究の中では従来等閑視されていた儀礼の諸側面、社会制度との関係に関する実態分析を行い、多くの面で研究上の新境地を切り拓いている。

本論文が人類学研究においてなした貢献は以下の諸点にある。

1. 「ポトラッチ儀礼」に関する従来の研究の詳細な批判的再検討をなしたこと。
2. 「ポトラッチ儀礼」を死者儀礼として捉え直し、「二重葬儀慣行」の一部として提示したこと。
3. 更に当該部族社会の変容過程にある全体構造を明確に提示していること。

上記のような研究上の貢献がある一方、以下のような課題を今後に残している点が指摘できる。

1. 本論文がめざした北西海岸インディアン社会のコスモロジーに関する記述とその解釈に関わる問題提起は、今後のより綿密な現地調査およびトリンギット族以外の資料との比較検討を通して更なる展開を行うことが期待されること。
2. 従来の贈与関係、勲功祭宴として捉えてきた当該儀礼に関する業績についても、その貢献度に応じた位置付けを行い総合的な全体像の中に組み込んでいく作業が望まれること。

本論文は、上記のような残された課題はあるが、論述の確実性、理論的な仮説提示において独創性を備えた極めて高い水準の作品であり、学界に一つの地歩を占めうるものと認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。